

特集 高木八尺 その学問と社会活動
——CPAS高木八尺デジタルアーカイブ公開に寄せて

特集にあたって

中野耕太郎

新型コロナウイルス感染症のパンデミックが始まってすでに1年以上を経過した2021年。この年も世界的な流行は終息の気配を見せず、国境を越えた知的、人的な交流は大きく制限されざるをえなかった。研究者が現地で文書調査を行ったり、海外の著名人を招聘して研究集会を企画したりするのは、なお物理的にも困難であった。だがその一方で、「コロナ禍」は、私たちに新たな気づきを与えてもくれた。それはオンラインを駆使した地域研究の可能性であり、これを支える研究機関の新しい役割であった。

こうした問題意識を背景に、アメリカ太平洋地域研究センターでは、2020年度東京大学デジタルアーカイブズ事業の資金援助を受け、センター所蔵の『高木八尺文庫』の主要部分をデジタル化しウェブサイトにて一般公開した。またこの新しい試みを世に問うべく、2021年11月6日、公開シンポジウム「高木八尺 その学問と社会活動——CPAS高木八尺デジタルアーカイブ公開に寄せて」をオンライン（Zoomウェビナー）で開催した。この日、「デジタル化」によってアクセスが容易となった『高木文庫』を素材として、アメリカ研究の巨人、高木八尺の生涯とその今日的な意義について活発な議論が行われた。本特集はこの公開シンポジウムでの報告と討論をもとに編集されたものである。

さて、高木八尺は戦前・戦後を架橋する近代日本の代表的知識人であり、20世紀中葉の日米関係に重要な役割を担った人物であった。戦前の高木は、1924年に開講した東京帝国大学法学部ヘボン講座（その後のアメリカ政治外交史講座）で教鞭をとりながら、ターナーのフロンティア学説を紹介した論文「米国政治史に於ける土地の意義」（1927年）や『米国政治史序説』（1931年）などを次々刊行した。そうした研究者としての業績に加えて、高木は1925年創設の太平洋問題調査会（IPR）に参加するなど、同時代の東アジアをめぐる国際関係にも深く関わった。さらに戦後は、アメリカ学会を創設し、『原典アメリカ史』シリーズ（岩波書店）を刊行するなど、地域研究としてのアメリカ研究の立ち上げに多大な貢献をした。本センター所蔵の『高木文庫』はそうした多岐にわたる活動のなかで集められた3,500冊に及ぶ蔵書とIPR等に関する一次史料群（約800フォルダ）、そして私蔵の書簡や未刊行原稿などから成るものである。

このような高木八尺の多彩な知的生活と『高木文庫』の独特の性格を反映して、シンポジウムには、多方面から気鋭の研究者の協力を仰ぐことになった。第一報告は昨年9月まで本センター助教として「デジタル公開」に尽力くださった政治学者の森山貴仁氏（南山大学）による『高木文庫』の全般的「解題」ともいべき考察であった。第二報告では、両大戦間期の東アジア国際関係史が御専門の高光佳絵氏（千葉大学）が、『高木文庫』を活用したIPR研究の最先端を披露してくださった。第三報告は、アメリカ外交史研究者の中嶋啓雄氏（大阪大学）が担当し、主として戦後再開する高木とチャールズ・ビアードの知的交流と日本におけるアメリカ研究の発展について論じられた。

この三報告を受けて、二名の討論者——三牧聖子氏（高崎経済大学）、橋川健竜氏（アメリカ太平洋地域研究センター）——が登壇し、さらに議論を深めた。1920年代の戦争違法化運動に関する著書をお持ちの三牧氏は、両大戦間期の国際協調主義と高木やIPRの活動の関係を問い直し、史学史に詳しい橋川氏は高木の「フロンティア」解釈を手掛かりに彼が抱いた独特のアメリカ史観を論じた。このようにパネル討論は、総じて、①IPRをめぐる戦前の国際関係と、②これとも関わる戦後のアメリカ研究、という二つの論点から高木のキャリアを再検討するものとなった。報告と討論の中では、デジタル公開された『高木文庫』がIPR創設の詳細を解明するカギを握っているという指摘（高光報告）や、世界中で権威主義的なポピュリズムが猖獗を極める昨今、民主主義への憧憬とアメリカ研究が一体化した高木の生き様に学ぶ点が多いという意見（三牧コメント）もあった。『高木文庫』が伝える史料群のなかに、そうした新しい知の「フロンティア」が存在することを確認できたことは、主催者として大きな喜びであった。

最後になったが、このたびの「デジタル化」の企画・申請段階では、当時本センター助教であった板山真弓氏（国土館大学）に多大のお力添えをいただいた。また、こうした新しい活動の前提として、長年にわたるアメリカ研究振興会の支援に基づく『高木文庫』の保存・整理事業があったことも申し添えたい。記して謝意を表すところである。